青梅市文化財ニュース

第４１２号

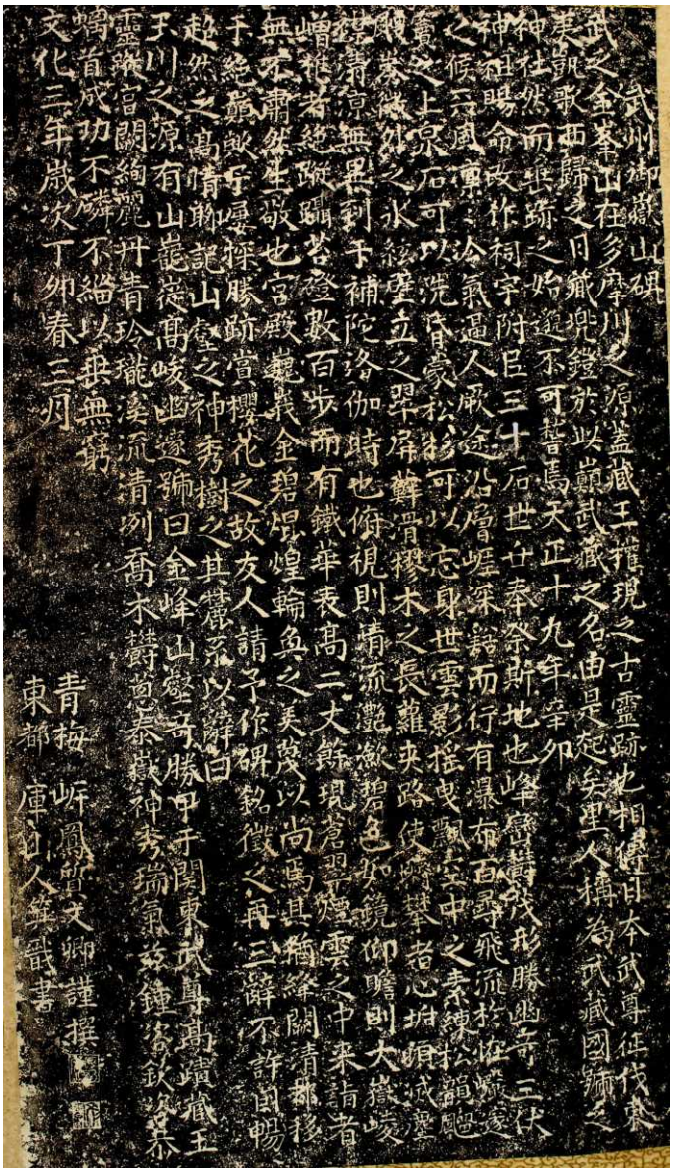
令和４年２月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

根岸典則撰文「武州御嶽山碑」

青梅市郷土博物館では令和４年１月８日より令和４年４月３日まで、企画展「青梅宿の文人・根岸典則―文芸サロンに集う人々―」を開催しています。青梅宿は江戸に近い自然環境の豊かな場所で、近くに石灰、林業、織物等の特産物がある経済的に恵まれた場所でした。このため江戸との文化交流が極めて盛んとなり、江戸文化の中心となる文人墨客が訪れ、また郷土の文化人も詩文、書画、俳諧等の各分野にすぐれた作品を残しています。根岸典則はこの青梅の文化人の中でも代表的な人物です（注①）。



「武州御嶽山碑」は市内に現存する根岸典則撰文の唯一の碑であり、市内西方に鎮座する霊峰・御岳山の事績が刻まれています。左の写真は碑文の拓本です（注②）。

場所・形状は青梅市文化財ニュース第２８０号「御岳古道」（注③）に記事がありますが、私有地内にあり付近に危険個所があるため見学には注意が必要です。

碑文１行目に題があり、２行目から１６行目は漢字４１２字にて本文が構成され、１７行目には成立年と根岸典則の名前があります。典則は通称を太兵衛、幼名は文太郎、字は文卿、鳳質または嶰谷（かいこく）と号し、渓雲軒ともいいました。文化３年３月は西暦１８０６年４月から５月頃にあたります。１８行目には揮毫（きごう）者の名前がみえます。本文は「新編武蔵風土記稿」に採録されています。

以下は読み下し文です。栗山亀蔵氏の訳文を引用しました（注④）。

武州御嶽山碑

武の金峰山は多摩川の源に在り。蓋し蔵王権現の古霊跡也。相伝ふ、日本武尊、東夷を征伐したまひ、凱歌して西帰の日、兜鎧を此の巓に蔵す。武蔵の名、是に由りて起これりと。里人称して武蔵国号神社と為す。然り而うして垂跡の始は、邈としてこれを稽ふべからず。天正十九年辛卯、

神祖命を賜ひて祠宇を改作せしむ。付するに三十石を以てし、世々斯の地を奉祭する也。峰巒欝茂し、形勝幽奇、三伏の候も尖風凜々として冷気人に逼る。厥の途、遠く層崖深谿に沿ひて行く。瀑布有り百尋、流を怪巌邃竇の上に飛ばす。泉石以て昏蒙を洗ふべく、松杉以て身世を忘るべし。雲影揺曳し空中の素練を飄し、松韻颼颼、徽外の永絃を奏す。壁立の翠屏、蘚滑らかに、樛木の長蘿、路を夾み、躋攀者を使て心垢頓に滅え、塵襟を清涼ならしめること、補陀洛伽に到る時に異なる無き也。俯視すれば則ち、清流瀲瀲として碧色、鏡の如し。仰瞻すれば則ち、大嶽峻嶒、樵者蹤を絶つ。苔磴を躡みて数百歩にして鉄の華表有り。高さ二丈余、蒼翠煙雲の中に現はれ、来詣する者、粛然として敬を生ぜざるは無き也。宮殿巍峨、金碧焜煌し、輪奐の美、以てこれに尚ふる蔑し。其れ猶ほ絳闕清都の絶巓に移れるがごときか。余、屢々勝跡を探り、櫻花を賞せるが故に、友人、予に碑銘を作りて之を微せんことを請ふ。再三辞すれども許されず。回りて超然の高情を暢べ、聊か山岳の神秀を記し、之を其の麓に樹て系くるに辞を以てす。曰く、

玉川の源　山有り巃蒐　高峻幽邃　号して金峰と曰ふ　山壑奇勝　関東に甲たり　武尊の高蹟　蔵王の霊蹤　宮闕絢麗　丹青玲瓏　渓流清冽　喬木鬱葱　泰嶽神秀　瑞気茲に鍾まる　咨欽し咨恭し　螭首功を成す　磷がず緇まず　以て無窮に垂れよ

文化三年歳次丁卯春三月　　青梅　岸鳳質文卿謹撰

東郷　庫山人箕戩書

青梅の豊かな自然がすぐれた文化人を育み、その人物が霊山の歴史と自然とをたたえる碑文を残しました。根岸典則の生涯から青梅宿の人々の文芸活動をたどる、今回の青梅市郷土博物館の企画展に皆様ぜひお越しください。

注①「増補改訂青梅市史上巻」青梅の文化人（平成 7 年 10 月 20 日）、ふるさとの文化財「根岸典則墓」東京都指定旧跡（青梅市広報平成 16 年 3 月 15 日）

注②市内在住の方の個人所有の拓本で、今回許可を得て使用しています。

注③青梅市文化財ニュース第２８０号「御岳古道」（平成 23 年 2 月 15 日）

注④「桑都日記続編」塩野適斎著 栗山亀蔵訳 鈴木龍二編（昭和 47 年 1 月 20 日）

（文責　黒田耕）